

HAT-J 北海道支部だより

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

しれとこすみれ

創刊号 1996年12月25日



シレトコスミレ
シレトコノアザミ
Yoshi Kikumoto



カラコルム シャーチェン氷河からリモ山群

写真と文 水越 武

地球は現代人の意識の中で日に日に確実に矮小化して行く。この美しい惑星は人類によって隅々まで足跡が印され、その活動の及ばない地域は、今まで不毛の地として見捨てられてきた、ごく限られた辺境の地のみとなってしまう。そこは最後まで人間の力を拒絶してきた高山、極地、砂漠、熱帯雨林などであるが、自然の最後の砦としての存在価値や意義が、時代と共にますます高まってくるに違いない。

ここは原始地球のなまの姿に触れることができる汚れない聖地であり、

太古のままの豊かな野生が息づく掛け替えのない所である。

また自然の虜となった人間の夢とロマンの活動の舞台で、存在そのものに無限の価値があると見えよう。

そしてこれから永遠に命をさずかるであろう我々の未来の子供たちのために、この最後の砦をけって明け渡してはならない。

ふるさとの山から

田部井 淳子



チョー・オユーをバックに真嶋さんと
明けましておめでとうございます。

会員の皆様お元気で新年をお迎えの事と存じます。昨年いろいろな事がありました。HAT-J北海道支部が発足したのは一層うれしい行事の一つでした。

発足式の後の懇談会も空沼岳の清掃登山も私にとっては忘れがたい思い出です。

トムラウシ山で青少年国際交流環境体験登山を行い、それがご縁でとうとう支部設立にまでこぎつけた皆様のパワーはすごいもんだと感激しました。全国にいるHAT-Jの会員の皆様と清掃登山を通して活動し語り合えるのはほんとうに幸せです。

昨年は北海道、帯広の会員真嶋花子さんとチベットのチョー・オユー国際公募隊に応募し、無事登ってくる事が出来ました。ウンチの持ち帰りも実行してみました。今後もこの持ち帰りは大事な検討事項の一つだと思っております。自分たちの足元にあるふるさと

の山から出来ることを実行してゆくのが私たちの活動です。今年もたくさんの方々によびかけ会員を増し交流出来ることを切に願っています。北海道の山々は多くの岳人の憧れの地です。花いちめん咲く頃また皆さんとお会い出来る事を楽しみにしています。

体も心も足も健康に自然の健康状態をいつまでも見守ってゆく企画をぜひたて下さい。北海道大好き会員が全国にはたくさんおりまので支部の皆様！たよりにしております。

今年もどうぞよろしく願いいたします。



北斗星で行く山旅

宮崎 初恵

今年の6月、田部井代表に出席していただき、北海道支部が設立しました。そして6月16日に、第1回清掃登山を空沼岳で実施することができました。北海道支部として山行活動は、その後ありませんでしたが、会員の方々が、他の支部の清掃登山や、公開講座等に参加、道外の人達との交流の輪が少しずつ広がってきています。

私も今年は、他支部の清掃登山に3回参加しました。1回目は、「新緑ハイキング・安達太良連峰・和尚山」、2回目は、「会津駒ヶ岳クリーン登山」、3回目は、「月山クリーンハイク」です。どれも思い出深い登山でしたが、2回目の「会津駒ヶ岳クリーン登山」は、尾瀬と組み合わせ、有意義な山行となりました。会津駒ヶ岳に登るには、東京の浅草から会津鬼怒川線に入るのが一般的ですが、私達は、夜行列車・北斗星で札幌を立ち、福島県の郡山市で降りて会津若松経由で入りました。東京経由より、費用も安く、又時間にも余裕があり、平家落人伝説のある会津駒ヶ岳山麓の檜枝岐村を十分に見学することができました。前夜祭では、檜枝岐村に伝わる歌



舞伎を見ることができ、登山以外にも得るものが、たくさんありました。クリーン登山は、約270名参加した盛大な山行でした。登り始めは天気が良く、期待に胸を膨らませていましたが、途中から雨と霧の視界の悪い残雪の上を登りました。山頂からは何も見えませんでした。到達した満足感がありました。

下山後は、檜枝岐村から尾瀬行きのバスを利用して尾瀬に入りました。バスの終点の沼山峠から歩いて約1時間で尾瀬沼に着きます。翌日は燧ヶ岳、翌々日は、至仏山に登りました。札幌を金曜日の夜に立ち、火曜日の夜羽田発の飛行機で帰った4泊5日の旅でしたが、三山を登ることができ、充実した旅でした。

北海道外の山に登るには、交通の便を工夫することによって、より充実した山行計画を立てることができます。

これからも、北海道の人達との交流を大切にすると同時に、他支部の活動に多くの方々が参加し、交流の輪が広がってほしいと思っています。



「初めての8,000m」

真嶋 花子

「私も8,000mへいけるだろうか」そんな野望を抱いたのは、1993年にハン・テングリ峰（7,010m）に登ってからだった。それまで6,000m峰をいくつか登りその次は7,000mと思い、7,000mを登ってしまうと又、次の山へと無謀にも欲がでてしまう。しかし、この時点では7,500mの山を計画したが95年の正月早々から私は足の骨折で

2ヵ月も病院にいた。医師から山登りの許可がでたのは更に3ヵ月後である。何もできないのに時間がどんどん過ぎていく。動くことがままならないケガ人には考える時間がいっぱいある。その結果こんなことを考えてしまった。

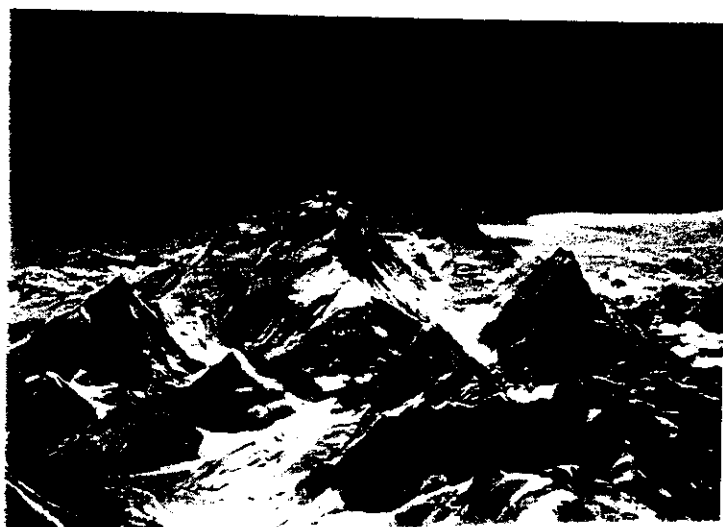
登れるか登れないかは問題ではなかったが、一度は8,000mを経験したい。年齢も一歳でも若いうちのほうが有利ではないか。色々考えた末、思い切って田部井さんに相談。

（私にとって8,000mは別世界。気軽に行きたいなんて言えなかった）しかし、田部井さんからは快い返事。8月にはもうひとりのメンバー倉井さんと3人で集まり話し合いが、始まった。「山はどこにしよう」「隊の編成はどうしよう」「3人で隊を組むと費用は高くつくし」等、決めなくてはならない事がいっぱい。翌1月には目標の山はチョー・オユー、公募隊に参加ということで決定。2月、「募集のパンフレット」を資料に具体的な話し合いが進んだ。国際公募隊への参加は91年の南極のビンソンマシフの時に経験し



ABCからのチョー・オユー

ているが、8,000mとなると内容が違う。日程、日本食の持ち込み、シェルパ、酸素など私たちの要求を出しラッセル氏に要望していった。6月に私と倉井さんが富士山トレーニング後、3回目の話し合い。日本出発まで3人での話し合いは3回しかもつことができなかった。後は都合のつく時、都合のつく人同士でのトレーニングであった。でも私には何度も一緒に国内外の山を登り気心の知った者同士、そして頼もしいメンバーであるから3人のチームワークについての不安はなかった。しかし、私たちは「一人一人が自主的に希望して参加する。登頂可能な人は一人でも登る。そしてなにより安全第一」と個人の意識を確認した。又、春のエベレストでの事故で国際公募隊が大きく取り上げられた。それらの印象は私にとって不安を募らせるだけだったが、同時に札幌の8人のチョー・オユー遠征隊隊員が全員登頂という快挙のニュースも入った。このニュースは私に「もしかしたら登れるかも」という少しの期待をもたらしてくれた。彼らの帰国後、隊長の佐藤氏から



チョー・オユー頂上からのエベレスト

直接詳しい話を聞くことができた。やはり北海道の同じ地盤でトレーニングした人の経験は非常に参考になり、そして心強かった。予定どおり8月20日成田を出発。22日にはカトマンズをシェルパ、コックそして客の一人であるスコットランドの32歳の青年とバスで出発。憧れのチベットはイメージどおり広大な大地と白く輝く山々。だが全く食べれなかったチベット料理（食べる時は美味しいのだが、消化に問題あり）しかし高所トレーニングで登ったニエラムの山は一面のエーデルワイスとピストルタ。背景には真っ白い山々。ここに來ただけでもいいやーと思うほどきれい。

28日BC入り。食堂、キッチン、倉庫、それに隊員一人にひとテント。さすが公募隊。9月1日5,700mのABC入り。ここからはチョー・オユーが目前に見える。双眼鏡ではC2から上部のルート、人の動きまで見える。「サーここからが辛い」辛いここまでは高山病もでていないが、胃袋がすっかり小さくなってしまい少ししか食べられない。ラッセル氏やシェルパたちは上部への荷揚げやルート工作に多忙だ。私たちは高所トレーニングをしながら個人装備の荷揚げ。さて、国際公

募隊、どんな人が参加するのだろう。興味津々。メンバーリストはカトマンズ出発前にもらっていたが全員が集めたのは12日。ABCの夕食はいつもスープから始まりデザートで終わる。いつもは寒く静かな夕食風景だが、今日は10名の客とラッセル氏。テント内は、人気で暖かく賑やかである。客は客でもただ者ではない。登山歴がすごい！エベレストやブロードピークに登った人、チョー・オユー頂上から無酸素でスキーで滑

ろうとする人など。私は「とんでもない隊に参加してしまった」と一瞬後悔。私が8,000mに行きたいなんてやっぱり無謀だったのだ。でももうここまで来ちゃった。いまさら氣後れしても遅い、自分の体力に見合った登りしかできない。しかし登るスピードが違い過ぎる。公募隊について、ザイルで引っ張りあげてくれるとか、お金さえ払えば誰でも登らせてくれるように言われているが、私たちの場合は決してそのようなことはなかった。登るスピードが「遅すぎる」と叱られ、ザックの荷が「重すぎる」と取り上げられ、なんでもハッキリ言われる。しかし、これも私たちを登らせようとする氣持からなのは十分理解できた。21日、C3を3時出発。途中飛ばされそうな強風にシェルパからいつ「ピークは諦めよう」と言われるのではないかとドキドキしながら登っていく。やっと9時15分、若いシェルパ・ロブサンダワ君と2人頂上からエベレストを見ることができた。ロブサンダワ君にとっても初めての登頂であった。しかし彼はエベレストの登頂者である。私たちは計画の時からシェルパと酸素の力を十分活用して登ろうと話合っていた。実際初めての8,000mは、シェルパと酸素によ

で登れた。天候にも恵まれたのも幸いだった。山は私にとってあくまで趣味のひとつ。楽しい仲間と自分の力量にあった登り方で楽しみたい。登山はあくまで自己満足と思っている。

いまだに 8,000m に登れたのが夢のようだ。成功できたのは、シェルパ、酸素はもちろんだが、やはり 2 人の仲間がいたから登れた。

最後に登山目標のひとつであった「テイク・イン、テイク・アウトの実践」について。私たちは、BC に入ってテント場の回りに散乱しているゴミに驚いた。プラスチック、ビン、缶そして食料品などの袋。これは今春までの登山隊の残していったゴミである。ここまでは車で入れる、という事はあらゆる物が持ち込まれる。しかし、ゴミは持ち帰らない様だ。私たちは、高所トレーニングの合間にゴミを燃やし、空き缶をつぶした。ラッセル氏に「HAT-J」の説明をした。彼は以前からゴミの持ち帰りには積極的に取り組んでいたので話は早かった。もっと驚いたには、ABC に入ってからだった。ここは実質上 BC となるため登山者はここに長期滞在する。それにここまではヤクが荷揚げをしてくれる。

登山者は頂上に登るために高いヤクの料金を支払い多めの食料などをあげる。しかし、登山終了後は高いヤクの料金を払ってまでもゴミを降ろそうとしないのが実際である。(注：ラッセル氏は降ろした) ここにもあらゆるゴミが捨てられていた。私たちはせめて日本語の書かれているゴミを拾い集めた。排泄物も C1 ではプラスチックの袋に入れて持ち帰った。(凝固剤と匂い消しで処理する) その後これは生ゴミとして処理された。

この秋、チョー・オユーには 18 パーティー、約 150 人が入った。各々の行動がその国の印象として外国人には残る。私もまた今回の遠征では、どこでもゴミを捨てる〇〇人、いつも他の隊が作ったルートを使う〇〇隊という印象をもった。

せめて、自分の持ち込んだゴミは自分で持ち帰りたい。

《隊の構成》

リーダー：ラッセル、ブライス（ニュージーランド）

隊員：田部井、倉井、真嶋、イギリス 4 人、アメリカ 1 人、アイスランド 1 人、イスラエル 1 人。

真嶋花子さん

チョー・オユー峰登頂報告会

北海道支部会員である、真嶋花子さんが 96 年 9 月 21 日、チベットのチョー・オユー峰（8,201m）に登頂成功されました。本号に登頂報告をお寄せいただきましたが、より臨場感あるお話をとお願いしたところ、ビデオとスライドを使用して報告会をしていただける事になりました。会員の皆様に下記の通りご案内致します。

日 時：1 月 18 日（土）PM 7:00～9:00

場 所：「つる」札幌市中央区南 1 条西 5 丁目日住金ビル B 1

電話 011-231-8357

会 費：3,000 円

知床の山小屋

管理人 法量 武

私が知床で唯一の山小屋「木下小屋」をお預かりしてから早や10年、現在の小屋に建て替えてからでも5年が経った。

私も山登りをする者の常で、若い頃から将来山小屋は建てたいとの夢を持っていたのだが、それが実現したのは木下さんのご理解とご支援があったればこそで衷心より感謝している。又、山仲間達からの応援は私の想像を絶するもので皆さんの山小屋に対する思い入れの深さを直に感じたものだ。

お陰様で完成した山小屋は一部とはいえ念願の丸太を積みテラス等を設けてログハウス風にして、広間にはレンガ造りの暖炉を設けたり、客室の吹抜けには大丸太の通し柱を建てたりしたので、山小屋の雰囲気をかもし出す事ができたと自己満足している。よくしたもので仲間に器用な人が居てバード・カービングで何種類もの鳥を柱の止まる木に並べてくれたので、これまたお客さんに喜んでもらっている。「木下小屋」は日本百名山の一峰、羅臼岳の登山口に建っているのでお客さんは全国からみえられる。この出合いは山小屋管理人の冥利に尽きるもにである。

今シーズンも多くの人達との出合いがあった。8月上旬には、HAT-Jの田部井代表も立寄ってくれた。私は日本人女性でエベレストに初登攀された方との思いが強かったので第一印象がどうもしっくりしなかった。

そうこうして9月も下旬に入った頃北見の増子さんから田部井代表がヒマラヤの高峰チョー・オユーに登頂成功されたとの報らせがあった。一ヵ月前に羅臼岳登山された帰途登山道のゴ

ミを拾ってきたと云ってビニール袋を下げてきた女性と同一人物なのだろうか、しばらく我耳を疑った程だ。普通のおばさんとしたか見えなかった私の識見の無さに恥じ入りばかりだ。こんな失敗もあったりしたが今シーズンもなんとか終わった。「木下小屋」にも来春の小屋開きまでお別れだ。

11月上旬 自宅にて

"WILDFLOWERS OF
SHIRETOKO"

知床に生息する植物を

画いたポスター

作：大瀬のぼる

1枚 300円

【販売所】 木下小屋

斜里町岩尾別温泉



だって、私HATの会員だもん！

坪原 美治子

9月の中を過ぎると、道内の山々の紅葉も見頃となり、山仲間は、あっちの山、こっちの山と忙しく出掛けて行く。ほんの10日間あまり山は一気に色ずき紅葉が里に駆け降りて来る。

私たちもそんな1日、トムラウシ山へ出掛けた。ご多分に漏れず登山口の駐車場は車が15~16台も止まっていた。連休のこともあって、山で泊まろうとしている人もいたが、台風が近付いていたので日帰りの登山者が多かった。

カムイサンケナイ沢からコマドリ沢あたりは丁度紅葉の見ごろで、さすがトムラウシの紅葉、とても色鮮やか。緑の笹の絨毯にナナカマドの紅いクッションが、ぽっ、ぽっとあってとても可愛い。その裾には黄色のナナカマド。登っては振り返り、登っては立ちどまり、トムラウシ公園あたりまで紅葉を楽しむことができた。

常に人とすれ違う。中高年が本当に多いと感心してしまう。

頂上付近はもう紅葉は終わっていた。テント場には2張りのテントがあった。いつも最後まで雪渓の残る水場は、雪が溶けたばかり、イワイチヨウがこれから葉を広げようとしていた。急がないと！雪が来てしまうよーっ。

驚いた事に、この南沼のテント場はロープが張られ、ロープ内でテントを張る様に看板が立てられていた。15年位前初めてここに来たころは、まだ殆どが草付きで、その上

でテントを張ってた。今あちことが大ハゲになっていてなんとも無残！

最近ツアーで沢山の登山者が入って来る。そんなこともあってか、テント場の周りのお花畑はトイレ場と化している。トイレの問題はそろそろ考えなければならない時期に来ているのでは。

昼食をとろうと良い場所を探していたら、あらっ！あのゴミ。」と友達が大きな声を出している。「いやー、なぁに、あれっ。」と私。ゴミが辺り一面に散らかっている。カレーライスのレトルトのパックやインスタント食品の空袋、おまけにワインの空ビンが3本も。ビニール袋にゴミを入れて岩影にでも捨てて行った物を、キツネか何かが引っ張りだして喰い散らかしたんだろう。

「もうーっ！ううー怒り心頭。」「私、捨てていくわ。」「えっ！捨てるの。」「だって私HATの会員だもん。」とつい口から出た何時もはこんな殊勝な私ではないのに、拾わずにはいられない状況。



日帰り用のザックはゴミでぷんぷんに膨れた。その上濡れているゴミはずしんと重く、5kg以上はあったと思う。目に余って友達が私のカメラや水筒を持ってくれた。

いいだけ飲んで、食べて、楽しんだ揚げ句重いからゴミは捨ててく不届き者。こんな風に食べ残した物を捨てて行けば人間にクマを近づける事にも成る。

いつも、いつも言われている事だが、持っ

てきた物は必ず持ち帰る。これは登山者の最低限のマナーではないか。

静かだった、遙かなるトムラウシ山はこんな風に、ハゲて汚れてゆくのは余りに残念！下りの足取りも重かったが、登って来た時より赤や黄の色がより鮮やかさを増した紅葉が私の怒りの気持ちを少し静めてくれた。

トムラウシは雪虫が舞い始め、夏山の終演を迎えていた。

HAT-J、北海道支部発足によせて

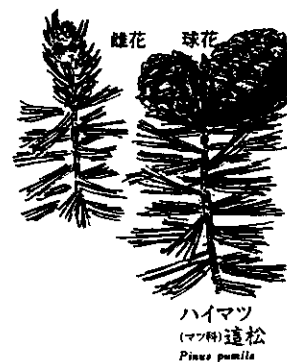
新得町立トムラ登山学校 太田 紘文

近年中高年層を中心に驚異的にふくれあがってきた登山人口、海外登山、国内登山を問わず、時間的、経済的ゆとり？何よりも長寿社会における健康維持に努めようとする自然回帰への現れでもあり、喜ばしいことではある。あのヒマラヤ遠征の残置ゴミを嘆かれ、ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト設立の発端となった田部井さんのご苦勞とともに今や国内の山々にも同じような考えを持たなければならないような現状が広がっている。

北海道各地の山を歩いても、登山道の小さなゴミもさることながら、登山道わきや、キャンプ地周辺のゴミ（特に汚物処理跡）は目にあまるものがある。これらは美感ばかりではなく、キャンプ地周辺の高山植物帯は踏み込まれて枯渇しており、さらにはキャンプ地へと流れ込む水源にまでその形が確認されており、衛生面でもかなり危険と思われる状態にある。人間の生理現象である以上、指定キャンプ地のトイレ設置はもちろんのこと、あらゆる場所での最低限の処理（若干の地表を

かぶせ、使用紙はビニール袋にて持ち帰る）は考えなければならないものと思う。

そういった現状を考えた時、自からはもちろんのこと多くの登山者にHAT-Jの存在をアピールし、山の美観、水源保持、そして自然保護へも大きな力となっていくことを願ってやみません。登山学校も微々ながら実践しているところです。



追悼 林田 正幹氏

花島 徳夫



今年の10月8日、ヒマラヤのアイランド・ピーク（現地名はイムジャツェと言われ、高さ6160m。エベレストの南7.5Km、ナムチェ・バサールの北東25Kmに位置する）にて、高山病により亡くなられました。衷心よりご家族の皆様に哀悼の意を表します。

林田さんとは、94年第三回トムラウシ山国際青少年環境体験登山に、中国語の通訳ボランティアとして参加した折りに、初めてお目に掛かりました。実行委員として会の成功に一生懸命働かれていたのが印象的でした。いつも微笑みを絶やさずに、何かと声を掛けていただきました。トムラウシ山には行かないが、留守部隊として、頑張るとも言っておられ、いつも縁の下で支えている感じがしました。これがきっかけで、HAT-Jに私をはじめ宮崎さんも入会しました。林田さんとはそれ以来、手紙を何度か頂くようになり、昨年の6月、林田さんから連絡がはいり16日に札幌に行くのでトムラウシに参加した人や

道内会員の人に会いたいと言ってこられました。早速、連絡をとり道内各地から13名が集まりました。大内会員の「つる」での会食となり、林田さんは本当に嬉しそうでした。この会を通して、北海道支部の設立準備へと進むところになったのです。以来、多くの会員の努力によって今年、念願の支部が誕生出来ました。林田さんには、誠に残念なことにこれから我々と道内の山歩きを一緒にと考えていたやさきの訃報でした。

アイランド・ピークには当初ルクラ経由で入る予定でしたが、天候不良のためカトマンズで5日間足止めされ、結果的には田部井代表、真嶋さん等に会われたそうです。遅れを取り戻すためシャンボチェに直行となり、10月4日5、100mのベースキャンプに入りました。林田さんは無理せず、ヒマラヤの景色に、その位置からはエベレストは手前のローツェ8516mにさえぎられ眺望できないがそれでも、2年近く前から私も聞いていましたアイランド・ピークに来れたのですから大満足だったことでしょう。7日、林田さんを除くメンバーは登頂に成功し、その翌日の早朝に林田さんは異常をうったえ応急処置をして急遽シェルパに負ぶされ下山しました。しかし、残念なまがら帰らぬ人となりました。時に63歳だったそうです。遺体は現地で茶毘に付され、16日に遺骨となって成田に帰国されました。田部井代表はじめHAT-Jの関係者が出迎え自宅までお送りしました。19日には狛江にて葬儀が執り行われ多くの会員が別れを惜しみました。

北海道の会員の皆様へ。どうか、林田さんの遺志を忘れずに、HAT-J北海道を大きく発展させましょう。合掌。

シレットコスミレによせて

斜里町 大瀬 のぼる

毎年のことながら 7月20日ころ

気分のすべては山にあり そわそわとなる
仕事などで足止めを食らうとなると

もう 無性に会いたさがつり 気が高ぶる
待っているはず 待たせたくないなどと

勝手に思いこみ 思い上がってしまっている
この時期 知床硫黄山の足どりは

実は重たいのだが いそいそのステップとなる
だから シレットコスミレとの出会いは

いつも 頬がゆるんでしまう

冷かしたいくらいの素直な自分になれるのである

「会報しれとこすみれ

によせて」

増子 麗子

シレットコスミレは、南岳から硫黄岳にかけて見られ、特に南岳を過ぎると群落しており、足の踏み場もないほどです。そこを通過する時には、ゴメンネ、ゴメンネと、つぶやきながら通るのです。私も今年は3年越しの挑戦、3度目にしてやっと満開のシレットコスミレに出会えました。その年によって開花する日が違うのと、期間が短く、又縦走して行かなければならないので、予想を立てるのですが、その頃になると知床を愛する人達は、

【作者紹介】

大瀬のぼる氏は、斜里山岳会に所属し、知床の自然を愛し、長年にわたり見守り続けています。知床の草花を画いたり、ボードカービグされたりして、その作品は、木下小屋の柱に止まり、今にもさえずりが聞こえてきそうな腕前の持ち主です。

皆、ソワソワしだすのです。来週か今週かと……………

そして、出会った時のうれしさ！白いきれいな姿がそこかしこに、風にそよいでいるのです。山がいつでも美しく、私たちに感動を与え続けてくれるように、H A T-Jがそのために活動して行く事を願い、会報名を「しれとこすみれ」とさせていただきます。大瀬さんには多忙にもかかわらず、題字と絵並びにメッセージまでもいただきまして、ありがとうございます。心より感謝申し上げます。

北海道支部新年会のご案内

〈田部井代表が特別参加致します〉

支部行事の一つである道内会員の新年交流会を、田部井代表が特別参加して下記の通り行いますのでご案内致します。

日 時：1月25日(土) PM6:30~8:30

場 所：「つる」札幌市中央区南1条西5丁目日住金ビルB1
電話011-231-8357

会 費：3,000円

尚、翌日26日、田部井代表と共に札幌近郊のスキー場で、ゲレンデスキーを予定しています。詳しくは、新年会でお知らせいたします。

編集後記

◆支部会報を作成するにあたり、多くの方から貴重な原稿及び写真をお寄せいただき深く感謝いたします。創刊号にふさわしい内容になったと編集人として自己満足しています。田部井代表が言っていた「裏山からヒマラヤマまで」揃いました。しかし、何分不慣れの発行が遅れたことお詫びいたします。(M)

◆記念すべき創刊号の第1頁に掲載させていただきました、水越武氏は最近、北海道新聞社より『カムイの森』という写真集を出されました。これまでも、『日本の原生林』（岩波書店・90年日本写真協会年度賞受賞）はじめ、多くの山岳・自然関係の写真集出されています。原稿と写真に添えられた手紙に、「ここは今は政治的理由で近づくことが難しくなってしまった氷河です。」という言葉が書かれていました。(H)

◆新年早々、2週にわたり楽しい会が催されます。きっと、参加した人はHAT-Jは素晴らしいということになるでしょう。これを機会に新しい山仲間を増やしてはいかがですか。(M)

◆林業ジャーナリストで北海道登山界の草分け的存在だった加納一郎(1898-1977)の著作『山・雪・森……霧藻庵雑記』（表紙：坂本直行画）の「自然保護ということ」の中で、「自然保護……大自然が人間を守ってくださる意味あいならば、素直にうけとれるけれど、今つかわれているのは、人間が自然を保護するというつもりらしい。……はなはだしい思いあがり」と、記している。大阪出身、北大農学部林業科、道庁拓殖部（国有林を大手製紙会社へ払い下げの仕事）、朝日新聞、札幌林業試験場以上が著者の経歴。(H)

◆「しれとこすみれ」は今後も発行いたします。道内会員の会報ですから、どしどし遠慮せず原稿、写真をお寄せ下さい。

HAT-J北海道支部だより 創刊号

発行日	1996年12月25日
発行所	札幌市北区北37条西5丁目1-32 〒001 花島書店内
	HAT-J北海道支部
TEL & FAX	011-737-9558
発行責任者	宮崎 初恵
編集責任者	増子 麗子